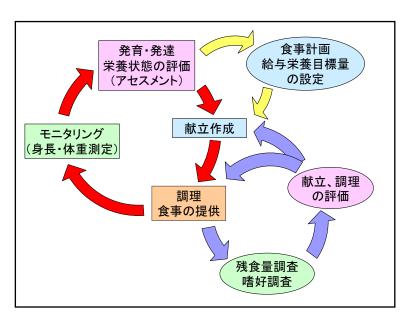
<参考> 児童福祉施設における食事の提供の状況

児童福祉施設における栄養管理の状況について以下の内容の研究報告がある。(「児童福祉施設の食事計画等の栄養管理の実態に関する調査研究(主任研究者 堤ちはる)」¹⁾)

- ・全国の市区町村の児童福祉担当主管課を対象とした調査では、「個々人の発育、栄養状態を基にした給与栄養量設定、食事計画立案」、「子どもの発育、栄養状態の把握・評価と、調理と提供の評価による食事計画改善」といった栄養アセスメントを基にした事項の達成度が低いことが明らかとなっている。
- ・全国の保育所を対象とした調査では、「給与栄養量が確保できる献立作成」、「献立作成の際の品質・多様性等の配慮」、「関係職員による情報共有・計画・評価」、「衛生的・安全な給食の運営」の項目は比較的高い達成度であったのに対し、「個々人の状況に基づいた食事計画」、「身体活動レベルの区分」、「定期的な身体計測・観察とその結果の評価」の項目は達成度が低く、個人に合わせた対応が十分でないことが示唆されている。
- ・全国の乳児院を対象とした調査では、給食計画がほとんどの施設で作成されていることが明らかとなり、その策定にあたっては、多職種、特に管理栄養士・栄養士、看護師、保育士の職種が連携(関与)している割合が高かった。栄養補給量に関しては、管理栄養士・栄養士を中心に、専門職並びに多職種から構成される会議によって決定されていた。献立の作成から個別対応については、食物アレルギー、体調、食欲、身体計測値、身体活動など多くの項目において考慮されており、盛りつけ量も個別対応されていた。しかし、食事状況、喫食量や発育・発達状況などの観察・把握・評価に関して、食事計画の策定に携わる管理栄養士・栄養士の関与は他の職種と比べて高くなかった。
- ・児童福祉施設における食事の提供にあたっては、図4のような「身長・体重測定」→「発育・発



達状態、栄養状態の評価(アセス メント)」→「献立作成」→「食事 の提供」→「定期的なアセスメン ト」の手順で進めていくことが求 められる。特に、栄養アセスメ トの実施と個人への対応の連携して を念頭におき、多職種で連携して サイクルに沿って円滑に実施して いくことが必要である。その際 は、現在、管理栄養士・ は、現在、管理栄養士が 配置されている場合には、その役 割の再確認が必要であると考えら れる。

図4 食事の提供の手順の概念図(参考文献1に基づいて作成)

(参考文献)

1) 平成20年度児童関連サービス調査研究等事業「児童福祉施設の食事計画等の栄養管理の実態に 関する調査研究」(主任研究者 堤ちはる)

〈参考〉 授乳や食事について不安な時期と保護者への支援

平成 17 年度乳幼児栄養調査¹⁾ によると、「食事で困っていることはない」とする回答は、昭和 60 年には 23.0%だったが、平成 7 年には 18.6%、平成 17 年には 13.1%に減少しており、子ども の食事で困っていることがある保護者の割合は増えている。授乳や食事について不安な時期は、 出産直後をピークに減少し、「 $2\sim3$ か月」では不安だったとする割合が低くなり、「 $4\sim6$ か月」で不安だったとする割合が再び高くなる傾向がみられた。また、 $1\sim3$ 歳児を持つ保護者の回答 からは、 1歳前後で高くなる傾向もみられた(図 5)。離乳食開始の時期で不安がうかがわれた。

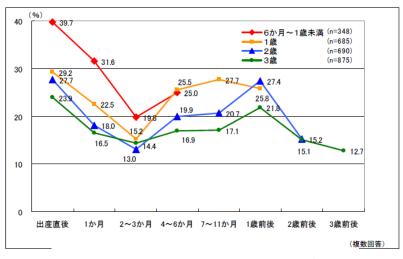


図5 授乳や食事について不安な時期1)

とって、離乳食の悩みが多く、 食べ物の種類が偏っている (28.5%)、作るのが苦痛・面倒 (23.2%)、食べる量が少ない (20.6%)、食べるのをいやがる (13.1%)が離乳食について困っ たこととして挙げられている。 これらは、月齢が上がるにつれ て、増えているものもあり、食 べ物の種類や量など、成長に合

離乳期の乳児を持つ保護者に

わせた進め方などについて、様々な不安や細かい疑問を抱えていることが推察される。また、調理に不慣れな保護者への支援では、手軽に作れる離乳食など、具体的な支援が必要である。

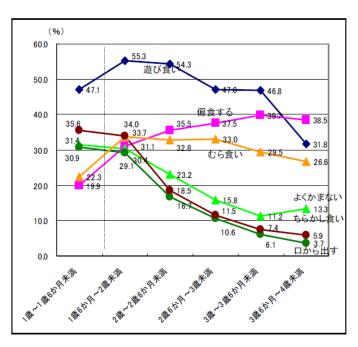


図6 年齢別 子どもの食事で困っていること1)

1歳以降の幼児の保護者の「子どもの 食事について困っていること」を示した ものが図6である。「遊び食い」が最も 多く、「偏食」「むら食い」と続いている。 子どもの食事について「困っている」こ とは年齢によって異なっており、「遊び 食い」や「むら食い」は、1歳後半から 2歳にかけて高くなるが、その後は低く なっていく。「偏食」は1歳後半から徐々 にその割合が高くなる。この時期の精神 発達は著しく、自我の芽生えに応じて、 食べる場面でも様々な行動をとるよう になり、食欲や食事の好みにも偏りが現 れやすい。1~2歳児は、食べにくさか ら食べられないこともあるので調理形 態の工夫が必要な時期である。一方、「よ

くかまない」、「ちらかし食い」、「口から出す」は1歳6か月から2歳をピークに減少している。

1歳児、2歳児、3歳児のそれぞれの悩みは発達によるものでもあり、発達が進むにつれ、安 定していくことが多いので、保護者の不安を軽減し、長期的な視点で見守り、対応していくこと が必要である。

栄養管理を進めるにあたって、はじめに実態把握(アセスメント)を行うが、家庭における乳児の母乳・育児用ミルク摂取状況や離乳食の進行状況、食事の摂取状況を把握する時に、保護者が不安に思っていること、悩んでいることも共有しながら、その不安感を取り除けるような援助も同時に行うことが大切である。そして、今後の離乳食の進め方や、家庭での具体的な関わり方を伝え、施設での離乳食の進行状況(食物の形態、量、食べ方、食欲など)や食事の様子を保護者に定期的に伝えながら、家庭での食事の状況を把握し、食事の悩みがあれば聞き、アドバイスする関係の中で子どもの食生活はより健全なものになり、それは保護者に対する支援にもつながっていく。

(参考文献)

1) 厚生労働省 平成17年度乳幼児栄養調査報告;2006